

述語の構造とアスペクト表現形式

丹羽 一 彌

はじめに

今の言語理論や文法概念の多くは印欧語やセム語など限られた言語を対象として作られたものである。アスペクトについても同様である。これらを所与のものとして異なるタイプの言語に適用すると、当該言語の特徴的な面を見落とすことになる。一言語や一方言の記述的な研究では、具体的な言語事象の観察によって当該言語に適した文法概念や枠組みを設定し、それによってその言語の表現形式を体系化すべきである。

本稿では、日本語の述語という枠組みの中で愛知県犬山市方言のアスペクト表現形式を整理し、当方言の接辞ヨルは、トルなどのアスペクト接辞とは文法的に異なる種類の形式であることを主張する。

従来、西日本型方言のアスペクトとして論じられてきたのは、アスペクトの意味体系やそれによる動詞分類などについてであり、トル・ヨルは対をなすという前提の下での技術的な議論に終始している感がある。言語構造の観察に基づいた当該方言のトルとヨルの機能やその相互関係を明らかにするという「概念作り」を企てたものは見当たらないようである。比較的早い時期にトルとヨルの相違を指摘したのは丹羽(1977)であるが、思考半ばで逃げていて、トルやヨルの意味や機能を定義するまでには至っていない。本稿ではこれを発展させ、ヨルは、アスペクト表現の接辞ではなく、表現主体の目撃や確認を表すムード的な接辞であることを明らかにする。

1 文法範疇と表現方法

印欧語と日本語では文法的意味の表現方法が大きく異なる。本節では印欧語的な文法範疇や概念を無批判に日本語の記述的研究に適用するのは適当でないことを確認する。このうち文法範疇などについては、丹羽(1999)で触れたことをやや詳しくしたものである。最近、峰岸(2000)が発表されたが、屈折語を「一定範疇言語」、日本語など膠着語を「不定範疇言語」とし、それぞれの述語をモデル化して、その相違を述べている。論は明確、教えられるところが多かった。

1-1 印欧語的な表現方法

印欧語の文法範疇とはいくつかの文法的意味を要素とする有限集合であり、文法的対立とはその中での要素相互の範列的關係のことである。

ラテン語の動詞は一定数の文法範疇から1個の意味を選択する。関係する全ての範疇から義務的に1個を選択するのであって、ある範疇をパスしたり、あるいは複数選択したりすること

はできない。動詞 *amat* は、辞書的意味「愛する」に加え、態、法、時制、人称、数という文法範疇から、それぞれ1個ずつ、能動態、直説法、現在、3人称、単数という意味を選択している。全部の範疇から1個ずつ選択するのであるから、どの動詞においても文法的意味の数は関係する範疇の数と一致し、一定である。

次に、動詞の文法的意味を表す部分を見ると、融合した1個の形式が複数の意味を表している。上の *amat* の語尾 *-t* は、各範疇内の対立関係の中でそれぞれの役割を果たしている。態では受動に対して能動であり、人称では1・2・3人称の中での3人称という役割である。*-t* はそれらの役割を束にして意味のグループを表しているのである。

以上のように、ラテン語の動詞の語尾部分は、各範疇から義務的に選択した意味を束にして表現している。範疇もその中の意味も数は有限であるから、それらを組み合わせることができる意味の束も有限である。従ってラテン語の動詞に関する形態論的記述は、意味の束を縦横に対立させている範疇的な形式の一覧表、つまり活用表を作ることである。

1-2 日本語の表現方法

日本語の文法的意味は個々独立に存在している1形式1意味の要素で表され、表現方法は必要な要素を必要な数だけ取り入れるオプション方式である。

日本語には文法的意味を要素とする有限集合としての文法範疇はない。共通語の受動はレル・ラレルで表される。これは一見、タベルとタベラレルが「能動：受動」で対立するペアをなし、タベラレルはその一方を選んだように見える。しかしこれらは範疇的な対立関係ではなく、ラレを取るか否かという統合的な関係である。無理に考えれば、タベ+ラレ+ル：タベ+ ϕ +ルという、ラレ： ϕ の対立と言えないこともない。しかしラレと ϕ の対立、ある要素の存在と不存在との範疇的な対立というのは、文法としては統合的でオプションナルということである。タベルの方はラレをパスしているのであるから、能動ではなく非受動、つまり無色である。タベ+ルのルが能動であれば、タベ+ラレ+ルのルの説明ができない。

このラレの意味は「受動」ではあるが、それは対立概念としての能動を背負った印欧語的な受動ではない。能動とは無関係に独立して存在する「結果の影響を受ける」という意味であって、「間接受身」もその中に含まれている。ラレが限られた動詞に接続した場合に印欧語的なヴォイスという角度から見れば、「能動：受動」の対立に似た意味関係が見られるのであり、日本語としては、それは意味の一面であるにすぎない。

次に形式と意味との関係を見ると、日本語では1個の形式は1個の意味だけを表し、ラテン語のように意味の束を表すことはない。逆に言えば、日本語の述語は1個の意味を表す部分にまで分割することができるのである。日本語の述語は1形式1意味のオプション要素を表現に必要なだけ並べた連続であるから、多くの意味を表すには、タベ+サセ+ラレ+マセ+ン+デシ+タなど、長い形式となる。一方、全部パスするならば、タベ+ルという、述語の終りを示すだけの接続した単純な形になる。

日本語の述語はオプション要素の連続であるから、要素の数や選び方は、無限ではないにしても、大量かつ多様である。ラテン語のような表現形式の一覧表を作ることはできない。従って述語に関する形態論的記述は、最小にまで分割した要素の意味を定め、それらの現れる順序を定めた枠組みを作ることである。これは方言記述の実践面では以前から説かれていることで

ある（南 1962 など）。

さて本稿の主題は日本語のアスペクトの表現形式である。西日本諸方言には進行を表すヨルがあり、東日本とは異なるアスペクト体系があると言われている。しかしこれは、トルでなければヨル、ヨルでなければトルという、文法範疇的な対立ではない。西日本型方言のアスペクト的意味を表現する形式、トル・ヨル・その他は、それぞれ固有の意味を持つ1形式1意味というオプション要素の一つである。それぞれの方言でこれらのオプション要素を述語構造の中に位置付ける枠組みを設定することが、当該方言のアスペクト表現形式の記述ということになる。なお本稿では表現の形式面のみを扱い、アスペクトの意味とか体系などについては最小限の言及に止める。

II 愛知県犬山市方言の述語の構造

以下の犬山市方言の話者は長谷川充（昭和 15 年生）である。筆者丹羽（昭和 14 年生）の内省も参考にした。

当方言の動詞のアクセントは述語の構造に関っていないので、必要のない限り言及しない。方言形はカタカナで表記し、必要に応じて簡易な音素表記をするが、/ / は省略する。また、形態の細かいことは今回の目的ではないので、それぞれの形式の分割方法については表記のようであるとしておく。

II-1 派生の接辞

当方言の派生動詞を形成する接辞のうち、アスペクト関係以外の主なものは下記のような。皿などを「不注意で本意ながら割ってしまう」意味のワラカス（war-akas-u）のような、地域的な意味を表すいくつかの接辞は除くが、全体の構造は変わらない。

- | | | | |
|-----------|-------------|----------|-----------|
| (1) トラセル | tor-ase-ru | （取らせる） | 使役 |
| (2) トラレル | tor-are-ru | （取られる） | 受動 |
| (3) トツタル | toQ-tar-u | （取ってやる） | 授受関係の授 |
| (4) トツテマウ | toQ-tema-u | （取ってもらう） | 授受関係の受 |
| (5) トラッセル | tor-aQse-ru | （お取りになる） | 尊敬（3人称のみ） |
| (6) トリャース | tor-jaas-u | （お取りになる） | 尊敬 |

共通語の述語では、動詞の後ろに、使役・受動・授受・アスペクトの順序で派生の接辞が接続している。当方言においてもこれらの順序は同じである。アスペクト表現の接辞を別にする、上の6個は、使役・受動・授受・尊敬の順序で現れる。授受は、トツテマウツタル（取ってもらってやる）のように両者が連続することがあるが、必要になれば分けることにして、今は一つの枠とする。

II-2 アスペクト表現の接辞

当方言でアスペクト的意味を表現している接辞には以下のようなものがある。個々の接辞についてその接続を動詞ごとに確認することも考えられるが、本稿ではまず表現方法の枠組みを作ることを優先する。アスペクト接辞を基準とした動詞の分類などは、表現の形式的な枠組み

とそれによって表現されるアスペクトの意味体系が明らかになった後の問題である。

- | | | | | | |
|------|----|-------|------------|------------|--------------|
| (7) | マド | アケトル | (窓を開けている) | ake-tor-u | 実現状態の継続 |
| (8) | マド | アケヨール | (窓を開けつつある) | ake-joor-u | 実現への進行 |
| (9) | マド | アケタル | (窓が開けてある) | ake-tar-u | 完了 (格関係が変わる) |
| (10) | マド | アケトク | (窓を開けておく) | ake-tok-u | 実現状態の維持 |
| (11) | マド | アケテマウ | (窓を開けてしまう) | ake-tema-u | 完了 |

アスペクトの意味を広く取り、テクやテクルなどを入れることも考えられる。テクの意味は、「色が消えテク」や「人が死んでク」のように、自動詞に接続して「実現に向かって自然に進行していく」一種のアスペクトであり、モツテクのように「持って」そして「行く」という本来の意味で使われた動詞とは異なるものである。今回はこれらを取り上げない。それについては後に述べる。

アスペクトのタルとテマウは、前述の授受のタルやテマウと同じ形式に見えるが、アクセントの型が異なる。授受のタルやテマウでは全体が平板型となるのに対し、アスペクトの方は、タルの部分が必ず「高低」となるし、テマウは動詞のアクセントの型を生かしているので、互いに別の形式であることが分かる。

	取る (高低)		貼る (低高)	
	トツタル	トツテマウ	ハツタル	ハツテマウ
授受関係	低高高高	低高高高高	低高高高	低高高高高
アスペクト	低高高低	高低低低低	低高高低	低高高低低

II-3 アスペクト表現形式の枠組み

西日本型方言のトルとヨルは完了と進行で対立していると言われている。しかし当方言のトルとヨルは対立しているとは言えない。それは以下の理由による。

まずトルとヨルの対立というのは、形式の面から見て問題がある。形式的な対立というのは同一環境の中で当該項目のみが異なる場合に言えるのであって、トルとヨルでは、接続する動詞の形が異なるので、同一の環境とは言えない。

次に、こちらの方が重要であるが、当方言ではトルとヨルが同一述語内で共起することがある。対立しているものは共起できない。

- | | | | | | |
|------|------|----------|--------------|----|---------|
| (12) | サカナガ | シンドッタ | (魚が死んでいた) | 完了 | 死亡した状態 |
| (13) | サカナガ | シニョーッタ | (魚が死につつあった) | 進行 | 死ぬ直前の状態 |
| (14) | サカナガ | シンドリョーッタ | (魚が死んでいたものだ) | | |

この(14)は、魚が既にシンドルという実現状態があり、そういう状態を繰り返し、あるいは習慣的に目撃したという回想の表現、つまり「川へ行くといつも魚の死体が浮いていたものだ」という意味である。この共起の場合、無理な場面を想定すれば非過去のシンドリョールも使えるが、回想の形で使われることが多い。

このように共起することから、トルとヨルとは相互に独立して存在するオプション要素であることが分かる。その統合的な構造は次のようである。

- | | | | | |
|---------|----|----|------------|-------|
| 死ぬ+φ | +φ | +タ | siN-da | シンド |
| 死ぬ+トル+φ | +φ | +タ | siN-doQ-ta | シンドッタ |

死ぬ+φ +ヨル+タ sin-jooQ-ta シニョーッタ
 死ぬ+トル+ヨル+タ siN-dor-jooQ-ta シンドリョーッタ

トルとヨル以外の接辞も共起する。そこで次に一つの述語の中で複数の接辞が現れるときの数と順序を見る。全ての場合の前後関係と、共起し得るものの例文は下記のようなのである。末尾がtaのものは主に過去形で使われるものである。

トル/ヨル	トル+ヨル	tor-jooQ-ta	
トル/タル			共起しない
トル/トク			共起しない
トル/テマウ	テマウ+トル	temaQ-tor-u	
ヨル/タル	タル+ヨル	tar-jooQ-ta	
ヨル/トク	トク+ヨル	tok-joor-u	
ヨル/テマウ	テマウ+ヨル	tema-joor-u	
タル/トク			共起しない
タル/テマウ	テマウ+タル	temaQ-tar-u	
トク/テマウ	テマウ+トク	temaQ-tok-u	
(15) ケーキ	キットリョーッタ	(ケーキを切っていたものだ)	
(16) ケーキ	キッテマツトル	(ケーキを切ってしまった)	
(17) ケーキ	キッターリョーッタ	(ケーキが切ってあったものだ)	
(18) ケーキ	キットキョール	(ケーキを切っておきつつある)	
(19) ケーキ	キッテマヨール	(ケーキを切ってしまいつつある)	
(20) ケーキ	キッテマツタル	(ケーキが切ってしまった)	
(21) ケーキ	キッテマツトク	(ケーキを切っておく)	

以上のような相互関係から、複数の接辞の共起する順序、つまりアスペクト表現の枠組みは下記のようなになる。2の枠内にあるトル・タル・トクは共起しないので、同一枠での対立と言えないこともない。トルと対立しているのは、ヨルではなく、タルやトクということになる。ただし義務的に1個を選ぶ印欧語のような対立ではない。

1	2	3
テマウ	トル	ヨル
	タル	
	トク	

この枠組みから、テマウとヨルはトルなどと性質の異なるものであることが分かる。特にヨルは、後に詳しく述べるが、他の全ての接辞と共起し、常にそれらの後ろに現れる点を強調しておきたい。

当方言のアスペクト表現の枠組みは3枠からなるから、理論的には3個の連続が可能である。3枠全部を連続させた例を作れば、temaQ-tor-jooQ-taなどが考えられる。

(22) サカナガ シンデマツトリョーッタ (魚が死んでしまっていたものだ)

トルなどとヨルの共起は、愛知県犬山市・春日井市東部から岐阜県可児市・土岐市にかけての県境付近の中高年層に見られる。しかしながら、この共起についての考察は、岐阜県土岐市方言を扱った丹羽(1977)以外見当たらない。また実例の報告も、『方言資料叢刊4方言アスペ

クトの研究」では名古屋市周辺の2例(138、139ページ)だけであり、「方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究」でも愛知県犬山市(担当丹羽)に見られるだけで、近畿以西にはない。このような質問に回答する形式では、質問文の作成や調査の仕方によって、存在する表現が拾えないことがある。しかし自然談話ではそういうことはない。国研の「方言談話資料」によれば、西日本各地に下記のようなトル・トク・タルとヨルの共起が見られる。この共起の意味が分からなかったとみえ、長崎県と鳥取県では共通語訳が不十分のように思われる。

長崎県	イレトルオットナンドン	(入れておったけれども)	(2) p.366
鳥取県	ホーリアゲトキヨッタダガ	(ほうりあげておいたんだよ)	(6) p.55
	ネットリオリマシタケナ	(眠っておりましたよ)	(6) p.70
宮崎県	アゲチャリヨッタムンジャケン	(上げてあったものだったが)	(6) p.208

これらの例からも、西日本型方言のトルとヨルは、対立するだけでなく、共起することもあるという観点で再考する必要があるのではないか。

11-4 述語の構造

前述のようにアスペクトを表現する接辞は授受の後に現れ、アスペクトの最後に位置するヨルは、(23)のように尊敬の前に現れる。

(23) トリョラッセル tor-jor-aQse-ru (お取りになりつつある) ヨル+尊敬

従って述語の枠組みは、授受と尊敬の間に、上記のアスペクト表現の3枠を続けたものとなる。この範囲の接辞に関しては、述語は合計7枠の枠組みとなり、この順序で連続させれば、アスペクトを含めて複数の接辞が共起させられる。

1	2	3	4	5	6	7
使役	受動	授受	テマウ	トル	ヨル	尊敬
				タル		
				トク		

しかしこの枠組みには注意すべき点がいくつかある。まず、完了のテマウと授受とはあまり共起しない。授受という意志を含む行為とテマウという「意外な結果の実現」の間には、意味上の矛盾があるからであろう。

(24) カッタッテマッタ kaQ-taQ-temaQ-ta (思わず、買ってやってしまった)

次に、トルは受動より後ろに現れるが、レル・ラレルが尊敬(高年層では共通語的)として用いられると、トルの方が前になる(25)。伝統的な尊敬の接辞-aQse-などがトルの後ろに位置するのに合わせて(26)、尊敬のレル・ラレルも後ろに現れるのである。レル・ラレルに関連して言えば、受動と尊敬のレル・ラレルは共起しないが、トルと共起する場合には、(27)のような形を想定することが可能である。ただし実際に使われることは少ないであろう。

(25) ミトラレル mi-tor-are-ru (見ておられる)

(26) ミトラッセル mi-tor-aQse-ru (見ておられる 見ていらっしゃる)

(27) ミラレトラレル mi-rare-tor-are-ru (見られておられる) 受動+トル+尊敬

さらに、授受関係のタルに完了のタルが連続すると、タル+タルとなってアクセントだけが頼りとなるので、テヤルという融合しない形が使われることも多い。

- (28) ミタツタル mi-taQ-tar-u (診てやってある)
 (29) ミテヤツタル mi-tejaQ-tar-u (診てやってある)

III 接辞の共起と構文論的意味

日本語の述語（動詞部分）は、オプション要素が連続したものであるが、述語内の全ての接辞が上記の枠組みの順序で並んでいるわけではない。それぞれが等価で行列を作っているのではなく、要素相互の連結の程度には強弱があるからである。

III-1 埋め込み部分のアスペクト

前節の枠組みによれば、アスペクト表現の接辞は使役や授受より後ろに現れるから、トル・トクなどは(30)(31)のように使役より後ろに現れるのが原則である。しかし(32)(33)のように逆の順序となっている例もある。そこで次にこれらの例外的な形と上記の枠組みとの関係を考えてみたい。

- (30) デサセトル de-sase-tor-u (出させている)
 (31) デサセトク de-sase-tok-u (出させておく)
 (32) デトラセル de-tor-ase-ru (出ているようにさせる)
 (33) デトカセル de-tok-ase-ru (出ておくようにさせる)

これを述語内部の問題として考えれば、(30)は「出させる」行為をトルという完了の視点で見ることに対し、(32)は「出る」行為を完了でとらえ、その完了した事実を使役の派生動詞にしていることになる。しかしこのトルの位置による意味の違いは、述語の範囲を越えて、文全体の意味の反映としてとらえた方が分かりやすい。

主語や目的語を備えた「AがBを出させる」という文の意味の構造を

[Aが[Bが出る]させる]

と考える。そうすると、(30)デサセトルのトルは、主語Aの行為に関するアスペクトであり、今現在AはBを外に追い出しているという意味である。これに対して(32)デトラセルのトルは、Bの行為つまり埋め込み部分の中のアスペクトであって、文の述語である主語Aの行為に関するアスペクトではない。従って述語全体では、いわゆる非過去であり、未来のある時点にBが外に出ている状態にさせるということである。前節の枠組みで扱っているのは文の述語のアスペクトであるから、(32)のような埋め込み部分の例は対象外であり、別の問題として扱われなければならない。(31)(33)のトクについても同様である。

授受の場合も文の構造としては同様に考えられる。

テマウ [Aが[Bが見る]してもらう]

タル [Aが[Aが見る]してやる]

主語のある文として考えると、(34)のトルは主語の行為、述語のアスペクトであり、現在の実現状態である。(35)のトルは埋め込み部分のアスペクトであるから、述語としては非過去である。

- (34) ミテマツトル mi-temaQ-tor-u (見てもらっている) 授受+トル
 (35) ミトツテマウ mi-toQ-tema-u (見ていてもらう) トル+授受

タル(してやる)の場合も構造は同じであるが、文の主語と埋め込み部分の主語が一致するので、意味の違いを感じにくい。動詞によっては、マツツタル(待っていてやる)のように、

埋め込み部分に付いた形を現在のことに使用することも多い。

- (36) ミタツトル mi-taQ-tor-u (見てやっている) 授受+トル
 (37) ミトツタル mi-toQ-tar-u (見ていてやる) トル+授受

文の述語というのは、埋め込み部分の動詞に接辞がついた一団の形式を「本動詞」として、それに枠組みに従って接辞を接続させたものである。アスペクト接辞のつけ方は下の(a)~(b)の4通りがあるので、(d)のように既にアスペクト接辞のついた「本動詞」にさらにアスペクト接辞がつくこと、つまり埋め込み部分と文の述語の両方にアスペクト接辞がつく場合も考えられないことではない。両方にアスペクト接辞が接続する場合は、一つの述語構造の中での共起とは異なるので、トクとトルのように同一述語内では共起しないものも現れ得る。無理に考えれば、両方にトルが付く例でも考えられる。

[Aが[Bが見る]させる]

- (a) ミサセル [mi-φ]-sase-φ-ru (見させる)
 (b) ミサセトル [mi-φ]-sase-tor-u (見させている)
 (c) ミトカセル [mi-tok]-ase-φ-ru (見ておくようにさせる)
 (d) ミトカセトル [mi-tok]-ase-tor-u (見ておくようにさせている)
 ミトラセトル [mi-tor]-ase-tor-u (見ているようにさせている)

III-2 テクについて

本稿ではアスペクト接辞としてのテクは除いた。その理由の一つは、トルやタルなどと比べると、テクやテクルの意味には方向があり、アスペクト以外の意味が強いと考えたからである。もう一つは、上のような埋め込み部分を持つ構造を考えた場合、テクは埋め込み部分にしか現れないからである。

授受の受のとき、次のような文と意味構造が考えられる。

AがBに死んでもらう [Aが[Bが死ぬ]してもらう]

この場合、テクは埋め込み部分にのみ現れ(38)、述語のアスペクトとしては現れない。テクが接続するのは変化を表す自動詞であるから、当然であるといえれば当然であるが、この点で他の接辞と異なるので、前記の枠組みから除いた。

- (38) シンデッテマウ siN-deQ-tema-u (死んでいってもらう)
 *(39) シンデマッテク siN-demaQ-tek-u (死んでもらっていく)

IV ヨルについて

一般には、ヨルはトルと対比させられ、同じようなアスペクト接辞であると考えられている。本節では、当方言のヨルの意味や接続などをやや詳しく見て、ヨルがトルなど他のアスペクト接辞とは異なる種類の接辞であることを主張する。

IV-1 ヨルの意味

ヨルに関しては意味について少し触れる。当方言を含めて、この地方のヨルの意味をアスペクトとして見ると、現実の動作や変化が始まり、あるいはまさに始まろうとし、連続的に完了

に向かって進行している様子である(丹羽1977)。アスペクトとして見ればこれでよいが、当方言のヨル本来の意味は、現象の目撃、目前でその現象の進行を目撃しているという意味である。つまりヨルには確認・経験という判断が入っているのである。

下の(46)では、表現主体が出来事を目撃したか否かは表現されていない。「新幹線が止まっているので、客は長く待っている」という新聞記事と同程度の認識であってもよい。トルは事実の叙述であり、目撃したか否かは意味の中に入っていないからである。(47)は石が落ちるのを実際に目撃している。しかし太郎の逃げる姿を目撃しているか否かは表現の中に入っていない。表現の時点で太郎がどこに逃げたのかわからなくてもよいし、自分と一緒に遠くから石の落ちるのを見ていてもよい。(48)の場合は、落ちる最中の石を目撃しながら、一方では逃げ惑う太郎の姿をも目撃しているのである。

(46) イシガ オチトルデ タローワ ニゲトル

(47) イシガ オチヨールデ タローワ ニゲトル

(48) イシガ オチヨールデ タローワ ニゲヨール

当方言で、上のニゲトルとニゲヨールの意味の違いは、太郎の行為が完了したか進行中かということではなく、表現主体が太郎を目撃・確認しているか否かである。ニゲトルの場合は、逃げ終わっている完了と、逃げている最中の二つが考えられるが、それはトルの意味に関してのことであり、トルとヨルの問題ではない。ただヨルは現象を目撃しているのであるから、アスペクト的に見れば進行と同じようになるのは当然である。

従って、瞬間動詞に接続する場合、ヨルは結果の実現が確信できなければ使えない。結果の実現が予定されていなければ、目撃や確認につながらないからである。(49)(50)は言えるが、(51)のような表現は当方言にはない。

(49) シニョールデ シヌヨ (死につつあるから死ぬよ)

(50) シニカケトルケド シナンヨ (死にかけているけど死さないよ)

* (51) シニョールケド シナンヨ (死につつあるけど死さないよ)

細かく観察すれば、当方言と同様、西日本型の諸方言のヨルにもアスペクトとは別の固有の意味が見られると思う。近畿中央部のヨルは待遇表現に使われるが、待遇というのは人間関係に関するものであるから、目撃とまでは限定できないにしても、表現主体の主観や状況判断が入っている。兵庫県加古川市方言のヨルとトルの間には、心理的・物理的距離を含めて「発話者のその動作・作用に対する観察の精粗という違いがある」ということである(中尾2000)。これは犬山市方言の目撃と極めて近い。また宇和島方言で、近くで泳いでいるのは「泳ぎよる」、遠くで泳いでいるのは「泳いどる」(工藤1983)というのも、犬山市方言と似たような意味の表れと思われる。ヨルには目撃・確認が入っているという視点で見れば、他の方言にも同様なことが観察されると思う。

愛知県稲沢市北部の方言ではヨルで進行を表すが、南部の方言ではこの意味のヨルはない。かつて使われていたものが消滅したと考えられる。しかし、タノミョッタ(頼んでいたものだ)やデヨッタ(出ていたものだ)など、過去を回想する表現としてのヨッタという形式がある(丹羽1982)。他にもこのようにヨッタだけ使われている方言は多い。上記のようなヨル本来の意味を認めると、こうした方言に回想のヨッタといわれる形のみ残存していることが説明できる。目撃や経験を表現するヨル本来の用法が過去形だけに残っているのである。

以上のように、ヨルは、アスペクト的意味以外のはっきりした意味を持っている接辞であって、トルと同じカテゴリー内で単にペアをなしているだけのものではない。

IV-2 ヨルの接続

ヨルには形式面でも特徴がある。接続の仕方がトルなど他の接辞と異なるのである。それらは互いに関連しているが、以下のように分けることができる。

第一は、前節の埋め込み部分との関係である。ヨルは、埋め込み部分の接辞になることはない。

- (52) ノマセヨール nom-ase-joor-u (飲ませつつある)
 *(53) ノミョーラセル nom-joor-ase-ru (飲みつつあらせる)
 (54) ノンドラセル noN-dor-ase-ru (飲んでいさせる)

文の意味が [Aが [Bが飲む] させる] の場合に、ヨルは、(52)のように述語の接辞となることができる。ヨル本来の意味から、このような判断の入る述語の接辞となるのは当然である。それをアスペクトという面から見れば、主語の行為の進行である。しかし(53)のように、表現主体が判断しない埋め込み部分の接辞になることはできない。それに近い意味の埋め込み部分を作るには、客観的なトルを使い、(54)のように実現した状態の意味にして使役の派生動詞にするのである。

第二は、他のアスペクト接辞との関係である。II節で述べたように、トル・タル・トクは互いに共起できないが、ヨルはそれら全てと共起でき、それらに後続して現れる。ヨルの意味が他の接辞で表現されたアスペクト的意味と競合せず、新たに目撃・確認という意味を付け加えられるために、アスペクトを表現する接辞と共起できるのである。

第三は、ムード的意味を表す形式との関係である。ヨルは希望や意志などを表す形式と共起しない。少なくとも共起しにくい。希望や意志などは、実現していないことに対する表現主体の気持ちであるから、実現しているものではない。従ってその行為が目撃できないから、これらとヨルは共起できない。トルはアスペクトという事実の捉え方であるから共起できる。

- (55) ホンデモ ヨンドリタイ (本でも読んでいたい) 希望
 *(56) ホンデモ ヨミョーリタイ
 (57) ホンデモ ヨンドロ (本でも読んでいよう) 意志
 *(58) ホンデモ ヨミョーロ
 (59) ホンデモ ヨンドロマイ (本でも読んでいようよ) 勧誘
 ?(60) ホンデモ ヨミョーロマイ

このように、トルはムード的意味を表す形式と共起するが、ヨルは共起しない。ヨルとムード的的形式は共にトルに後続する。ということは、ヨルは、トルに対して、ムード的的形式と同じ関係にあるということである。上の(60)では、下の命令と同様に相手に対する表現であるから、言おうとすれば言えるが、ヨモマイ (読もうよ) を使う方が多い。ただし「行く」のような動詞では、イットルとイキョールの意味が明白に異なるので、無理に言えば、イキョーリタイ、イキョーロ、イキョーロマイという連続も可能のように思われる。しかしその場合もやはり、イキタイ、イコ、イコマイを使うのが自然である。

表現主体の気持ちであっても、命令表現の場合は、相手の行為であるためか、ヨルは共起できる。目撃できるようにせよという命令であろう。動詞が「書く」などではカイトレとカキョ

一レの意味の違いは微妙であるが、上記「行く」のような動詞の場合、はっきりと意味が異なる。

- (61) サキニ イキョーレ (先に行きつつあれ)
 (62) サキニ イットレ (先に行っている、到着している)

第四は、接続できる範囲の問題である。ヨルの過去形は、他のアスペクト接辞が接続しない動詞アル(有る)や形容詞にも接続する。

- (63) ヨーケ アリョーッタヨ (たくさん有ったものだよ)
 (64) ムカシワ サブカリョーッタ (昔は寒かったものだ)

これは他地域の回想のヨッタと同じであり、過去の目撃や経験を表現している。また大正生まれくらい世代では形容詞にも接続する。形容詞に接続するのは、トルなど他の接辞と異なる点であるが、当方言だけではなく、回想のヨッタを持つ他方言でも広く見られる。アルや形容詞の表す状態に進行はないから、この場合は、アスペクトではなく、ヨル本来の意味で使われているのである。ただし当方言にはヨルのままで接続するアリョールという表現はない。

既に述べたように、ヨルはトルと共に起した場合、ヨッタの形で現れることが多い。動詞にトルが後続した形式は実現した状態を表している。状態を表す形式に接続するのは、形容詞などに接続するのと同じことであるから、ヨッタとなるのである。

さらに第五としては、接続する動詞の形である。他のアスペクト接辞が音便形に接続するのに対し、ヨルは語基部分(起源的には連用形)に接続する。そのために他の接辞は起源的に「てー」で表される共通の意味を持ち、これがアスペクトの意味に関係していると考えられる。しかし今回は他の接辞の意味にまで問題を広げないようにする。

IV-3 ヨルの特異性

当方言のヨルは、他の全てのアスペクト接辞と共に起でき、ムード的意味を表す形式とは共に起できない。また判断の及ばない埋め込み部分には現れない。さらにアルや形容詞にも接続する。それに加えて意味の面では、アスペクトとは異なる目撃・確認を表している。それらを積み重ねていくと、ヨルの持つ特異性がはっきりしてくる。ヨルは、トルなどと異なる文法的環境に現れ、異なる意味を持っている。ということは、他のアスペクト接辞とは別の種類の形式だということである。

別の種類であるから、トルとヨルを同一平面で扱うことはできない。従って(65)のような両者が共に起している例では、ヨルは、(a)のようにトルと並立しているのではなく、(b)のようにもう一つ外側に位置しているとみなすべきである。アスペクト表現ではなく、「命題」の外側にある表現主体の目撃・確認の表現である。

- (65) Aガ Bニ カカセトリョーッタ (AがBに書かせていたものだ)

×(a) [Aが [Bが書く+ ϕ] させる+トル+ヨル] タ

(b) [[Aが [Bが書く+ ϕ] させる+トル] ヨル] タ

一般的な図にすれば、ヨルの付いた文の意味は次のような構造である。

[表現主体 [Aが [Bが書く] させる] 目撃]

同様に、トルの付かないカカセヨールであっても、ヨルは「させる」に直接接続しているのではなく、[[[書く+ ϕ] させる+ ϕ] ヨル] という構造と考えられる。

このように考えれば、カイトルとカキョールの違いも明らかになる。この二つは共に進行を

表していると言われるが、次のように異なる構造である。トルの方が実現した事実の描写（アスペクト）であるのに対し、ヨルの方は目撃・確認という表現主体の判断の表現である。そういうヨルを限られた一定の視点から見ると、「未完了・進行」の表現と解することも可能であると言えるに過ぎない。

カイトル [ϕ [Aが書く+トル] ϕ]

カキョール [表現主体[Aが書く+ ϕ]ヨル]

以上のように、ヨルは、トルなどのアスペクト接辞とは異なる種類のものである。従って当方言に限ってのことかもしれないが、トルとヨルとを対比させてきた西日本型のアスペクト体系なるものも再考する必要がある。文法的なものではなく、文法とは無関係の純粹に意味の世界のこととなるからである。

さて、他方言ではトル・ヨル共起の報告が少ないから、上記のような当方言の意味構造の違いがそのまま適用できるかどうかは検討する余地があるが、適用できれば、見えてくるものもある。工藤（1983）によると、宇和島方言ではシトルは現実を「状态的＝静的」にとらえ、シヨルは「過程的＝動的」にとらえるという対立があるという。静的・動的というのは、文法概念としてのアスペクト的意味と言えないであろう。この説明では二つの意味の違いをアスペクト的に区別しているとは言えない。しかしトルとヨルの違いは、アスペクトではなく、上記の意味構造の違いであるとすれば、静的・動的という説明も容易に理解できる。

また、当方言のトルとヨルは文法的に別の種類であり、一方はアスペクト接辞ではないから、金水（1995）のようにこれらの接続した形を「弱進行態」として一つ概念にまとめることはできない。もちろん金水（1995）では、複数の言語を説明するために、工藤（1983）の静的・動的を無視して一括するとあるから、無理を承知でのことである。しかし当方言に限っては、異なる構造の形式をまとめて弱進行態とする提案を受け入れるよりは別の解決法を求めた方が建設的であると思う。

工藤（1983）や金水（1995）のように話が難しくなるのは、ヨルの持つ意味全部がトルと対立するものと考え、全てをアスペクトという所与の文法概念の中だけで説明しようとするからである。ある理論で説明できない食い違いがあれば、理論より事実を優先すべきであろう。それぞれの言語事実を詳細に観察し、それに適した枠組みに則って現象を処理すれば、もう少し話は分かりやすくなるのではないか。当方言のヨルに関しては、アスペクトという分野から離して考えれば整然と説明できることが多い。

まとめ

日本語の述語は1形式1意味のオプション要素の連続であり、アスペクト接辞も要素の一つである。犬山市方言の述語の構造は、それらの要素がⅡ節の枠組みに従って連続したものである。ただし理め込み部分のアスペクトは別に考えられなければならない。

また接辞の中でも、当方言のヨルは、トルなどのアスペクト接辞とは文法的に異なる種類のものである。従って当方言では、トルとヨルとを対にしたアスペクト体系というものは見せ掛けのものであり、文法的なカテゴリーとしての存在は疑問である。

蛇足ながら、理論や一般概念の研究と平行して、個別言語の具体的な現象を詳細に観察し、

記述する努力が必要である。その結果が理論の有効性を高めることになる。

引用文献・資料

- 金水 敏 (1995) 「いわゆる『進行態』について」(『築島裕博士古希記念国語学論集』汲古書院)
- 工藤真由美 (1983) 「宇和島方言のアスペクト」(『国文学 解釈と鑑賞』48-6)
- 中尾亜有美 (2000) 「兵庫県加古川方言の『ヨル』『トル』について」(『ことばの研究』11 長野県ことばの会)
- 丹羽 一彌 (1977) 「トル・ヨル考」(『東海学園国語国文』11)
- 丹羽 一彌 (1982) 「文法」(『新修稲沢市史』研究編六 社会生活下)
- 丹羽 一彌 (1999) 「言語学・日本語学・方言学」(『日本語論究 6 語彙と意味』和泉書院)
- 南 不二男 (1962) 「文法」(『方言学概説』武蔵野書院)
- 峰岸 真琴 (2000) 「類型論から見た文法理論」(『言語研究』117)
- 工藤真由美他 (2000) 「方言のアスペクト・テンス・ムード体系変化の総合的研究」(文部省科学研究費基礎研究(B) 研究成果報告書)
- 国立国語研究所 (1979) 「方言談話資料 一奈良・高知・長崎一」
- 国立国語研究所 (1982) 「方言談話資料 一鳥取・愛媛・宮崎・沖縄一」
- 方言研究ゼミナール (1994) 「方言資料叢刊 4 方言アスペクトの研究」

付記 本稿は平成12年度文部省科学研究費(基礎研究b)「方言のアスペクト・テンス・ムード体系の総合的研究」(研究代表者工藤真由美)による研究成果の一部である。